

「安心できる居場所をめざして！学校における支援体制強化」事業の取組状況について
【スクールソーシャルワーカーの増員及び学校配置】

近年、子どもたちは学業成績・友人関係・家庭環境といった様々な要因から、不登校・いじめ・ヤングケアラー等の複雑かつ高度な問題を抱えています。そのような子どもたちに寄り添い、支援していくことが学校には求められています。

しかし、このような問題は、学校だけで解決が難しい問題が多いため、スクールソーシャルワーカー（「以下、SSW という」）が関係機関と連携を取りながら、ネットワークを構築し、子どもたちの課題にいち早く取り組めるよう体制構築を行っております。

1 事業概要

令和5年度より教育支援センターからの派遣型から区立中学校2校に1名の拠点型へと変更し、日頃から子どもたちの様子を確認できる現場支援へ移行し、気づきにくい家庭的・生活的課題の早期発見に努め、福祉的な支援により問題の深刻化を防ぐため活動している。

	令和4年度	令和5年度	配置状況
人員体制	6名	11名	一人当たり中学校2校及び学びのエリアの小学校を担当（6校～8校を担当）
支援方法	派遣型	拠点型	

2 学校配置の検証

令和5年4月から8月までの活動実績について、各SSWからの活動報告及び学校現場での活動実態の把握のため、以下の取組みを実施した。

① 学校現場の実態把握（全中学校長へのヒアリングの実施：22校）

中学校配置となったことにより、学校内での活動状況や保護者対応を確認するとともに、学校からの要望の聴き取りを行った。（8月21日～9月1日 延べ7日間）

ヒアリング結果：教職員との対面でのコミュニケーションが図られ迅速対応が可能

手続きの緩和（派遣申請不要）、手厚い家庭訪問・登校支援サポート

生徒の学校生活における観察・把握可能

② SSWの活動状況把握（全SSWへの個人面談の実施）

学校配置となったことにより、新たに見えてきた課題や活動方法の見直しの有無などを聴き取りを行った。（8月21日～8月25日 延べ3日間）

面談結果：学校内において、一人専門職であることへの支援体制や困難事例への不安

（具体的要望）情報共有の場の確保（近隣エリアでの共有）

複数対応ケースへの支援体制

小学校との連携体制、学校間での支援格差の解消

3 中間総括（4月～8月）

① 対応件数（支援対象者数）

	R4 年度	R5 年度	対前年度増減率
支援対象者数（幼・小）	92 人	193 人	209%
支援対象者数（中）	52 人	146 人	280%
合 計	144 人	339 人	235%

② 対応件数（訪問回数 ※関係機関等への訪問含む）

	R4 年度	R5 年度	対前年度増減率
訪問回数（幼・小）	268 回	719 回	268%
訪問回数（中）	176 回	817 回	464%
合 計	444 回	1,553 回	350%

③ 対応件数（訪問学校数）

※月平均訪問数

	R4 年度	R5 年度	対前年度増減率
訪問学校数 （幼・小・中）	43 校／75 校 (57.3%)	74 園・校／75 園・校 (98.6%)	172%

④ SSW 一人当たりの対応件数

	R4 年度	R5 年度	対前年度増減率
支援者数（合算）※平均	24 人	31 人	129%
訪問回数（合算）※平均	74 回	141 回	190%

⑤ 主訴別対応割合（R5 年 8 月）

ア 不登校(44.7%) イ 家庭環境の問題(17.4%) ウ 発達障害等に関する問題(16.8%)
エ 心身の健康・保健に関する問題 (7.5%) オ 児童虐待 (4.8%)

4 今後の展開

中間総括の実績及び各ヒアリング・個人面談の結果を踏まえ、次の課題が見えてきたため、次年度に向けて早急な支援体制の改善を図る。

■学校間での支援格差の解消

担当する SSW の経験や実績により、支援レベルに格差が生じてしまうため、新人 SSW へのサポート体制を図る。

■複雑・困難ケースへの対応

様々な背景を抱えている家庭への支援は複雑化しており、その対応についても高度な知識や対応が求められる。そのため、SSW の複数対応による支援体制の構築が必要である。

■小学校への支援体制の拡充

中学校からの支援充実も大きな効果があるが、さらに早期から福祉支援を行うことで不登校やヤングケアラーの問題の改善を図り、中学校進学前に課題解決を図る。